

「お疲れさまです」

フロントの男にそう言われて、僕は差し出しかけた予約画面を一度止めた。

ここは駅から三分の場所にある、深夜一時前のカプセルホテルだ。それでも、この半年で月に一度は泊まっていたから、顔を覚えられていても不思議ではなかった。

「三階のCブロックです。いつもの場所が空いていました」

「……ありがとうございます」

ロッカーキーを受け取りながら、少しだけ肩の力が抜けた。出張最終日。

最終の一本前の新幹線で駅へ着いたのは、日付が変わってしばらくした頃だった。明日の朝いちばんの打ち合わせまで、あと七時間しかない。

検索画面に残り一枠と表示された見慣れたホテルを、迷わず予約したのだ。

(覚えられるくらい、来てたんだな)

僕は、カントボーイだ。

外見は男にしか見えないが、着替えには気を遣う。カーテンの中で人目を避けられるのも、このホテルを選ぶ理由だった。

靴を袋へ入れ、バッグを抱えて三階へ上がる。満室のはずの廊下に人影はなく、空調の低い音だけが響いていた。

Cブロックの奥、いつものカプセルへ滑り込む。バッグを端へ押し込み、仰向けになると、ようやく今夜の移動が終わった気がした。

カーテンを閉じると、左右から寢息が聞こえてくる。誰かが寝返りを打つたび、壁一枚向こうの気配が耳元まで迫った。

(狭いけど、もう慣れたな……)

毛布を胸まで引き上げる。明日の資料はバッグに入っている。

目覚ましも設定した。あとは眠るだけだった。

そのはずだった。右隣のカプセルで、カーテンが、さらりと揺れた。

気にするほどのことじゃない。隣の人が寝返りを打っただけだ。

そう思っていたのに、薄い壁と、隣り合った二枚のカーテンを越えて、ぼそりと声が落ちてきた。

「——眠れないだろ♡」

「いつも、この時間だな♡」

低くて、静かな声だった。誰かを起こすつもりのない、ぎりぎりの音量。

「……っ」

反射的に息を詰めた。隣の人と話したいわけでも、存在を知られたいわけでもない。

知らない相手に話しかけられただけで、どう返せばいいのか分からなくなる。

「出張帰り、だよね♡」

その声は、確信を持っていた。訊いているというより、確かめているという感じで。

「……え」

「今日、最終の一本前だったろ♡ 二十一時五十四分の」

背中が、ずっと冷えた。

「……なんで、」

「知ってるよ♡ 君のことだもん♡」

カーテンの向こうで、布が動く気配がした。こちらを向いて、横になったまま、すぐ壁のところまで寄ってきている。

声が、さっきより近い。

「四月は、二十二時四十五分に来た♡ 五月の頭は、

二十三時十分♡ 六月は二回とも、日付が変わる前だった♡」

（なにを、言ってるんだ）

数えられている。回数まで。

細かいところまで。僕は、そのうちの何回かしか、自分では覚えていない。

「……人違いです」

「人違いじゃないよ♡ 佐伯、悠真くん♡」

名前を呼ばれた。喉の奥が、からからに乾いた。

この部屋には、名前を名乗る欄なんてない。チェックイン端末へ入力しただけだ。

「前に、チェックイン端末へ名前を入れてるところが見えたんだ♡」

（——え）

「今日は、空いてる部屋からここを選んだ♡ いつもより、ちょっとだけ早く来たんだよ♡ 君が来る

の、待ってたから♡」

その一言で、ようやく分かった。この人は、偶然ここにいるんじゃない。

この半年、ずっと——隣に、いた。

「……ッ」

「怒った♡？」

「ちが、」

「ならいい♡ 君、無視しないで答えてくれるから♡ やさしいよね♡」

やさしい、なんて言葉が、頭の上を通り過ぎていく。やさしいんじゃない。

断るのが怖いだけだ。そのくらいのことも、この状況では言い返せない。

「お疲れさま♡」

その一言が、じわりと胸に染みた。今日一日、誰

もそんなことを言ってくれなかった。

正確には——言ってもらう暇すら、なかった。

「……ありがとう、ございます」

囁き声で返してしまった。返した、という事実、自分でぞっとする。

それきり、声は途絶えた。終わったんだと思った。

毛布を胸元まで引き上げて、目を閉じる。けれど、右のカーテンが、かすかに開いた。

靴下の足が、廊下を一步だけ進んで、僕のカプセルの前で止まる。

（まさか、こっちに）

カーテンの端から、指が一本入ってきた。

「……っ」

あまりにも静かな侵入だった。声が出るより先に、

体が固まる。

その指が、カーテンをゆっくり折り返した。廊下で身を低くした男が、隙間から顔をのぞかせる。

二十代後半くらい。整った顔に、細められた目。

髪は短く、首筋がきれいだった。それでも、知らない男には変わらない。

「あ、あの……何か」

「少し、詰めてくれる♡」

「え」

聞き返しているあいだに、男の膝がカプセルの中へ入ってきた。

「待って、ください」

「静かに♡ みんな寝てるよ♡」

返事を待たずに、男の体が滑り込んでくる。背後でカーテンが閉じられた。

布の擦れる小さな音さえ、この狭さではやけに大

きく響いた。慌てて上体を起こして、奥へ下がる。

背中は、すぐ壁に当たった。肩が触れれば、腕も、太腿も触れる。

頭上には七十センチほどの高さで天井があって、横を抜けて逃げる余白もない。

僕のカプセルの中で、知らない男と二人きりになった。毛布越しではなく、もう直接、隣から男の体温が伝わってくる。

「あの、戻ってください」

「戻るけど♡」

「……じゃあ、」

「まだ♡」

男が、静かに笑う気配がした。それから、僕の髪を、指の背でひとつ払った。

乱れていた前髪が、額からどけられる。

「髪、伸びたね♡ 五月のときより、ちょっと長い♡」

(五月の、とき)

その一言で、背筋が粟立った。あの日、僕はこの箱で、ひとりで寝ていたはずだ。

誰かに見られる覚えなんて、どこにもない。なのに、この男は、ちゃんと覚えている。

「疲れた顔してる♡」

「だ、大丈夫です。だから、」

「ここ、硬いよ♡」

僕の言葉に重ねるように、男の親指が、首の付け根を押した。肩を引かれて、背中が壁から離れる。

体を引こうとすると、反対の手で手首を掴まれた。

「ちょっとだけ、力、抜いて♡」

「でも」

「抜いて♡」

言い終えるより先に、指が動き出した。首の付け

根、肩甲骨の内側、背中の僧帽筋。

揉まれるたび、こわばっていた筋が、一本ずつほ
どけていくのが分かる。気持ちいい。

けれど、知らない男に手首を掴まれたままだ。そ
の怖さと、肩をほぐされる感覚が混ざって、どうす
ればいいのか分からない。

声が漏れそうになって、慌てて口を噤む。他人の
寝息が、すぐそこにある。

カーテン一枚越しで、誰かが眠っている。声を出
したら、全部聞こえる。

怖いのに、緊張するほど、体の感覚だけが尖って
いく。指の圧が、服の上からでも、皮膚の奥まで届
いてしまう。

「ここ、ずっと張ってたね♡」

男の親指が、首の付け根の、凝り固まった一点を
押さえた。

「う……ッ」

息が詰まって、押し返すように男の腕を掴む。

「声、我慢できる♡」

耳のすぐそばで、ほとんど吐息みたいな声。

「や、やめて、ください」

「大きい声、出したら、みんな起きるよ♡」

脅しているようには聞こえなかった。だからこそ、逆らって騒ぐこともできない。

男の手が、下がっていく。肩から、背中へ。

背中から、腰へ。

「ちょ、」

「声、出すなよ♡」

低くて静かな牽制。外では誰かが、かすかに寝返りを打った。

助けを呼ぶ勇気も出せず、僕は唇を噛んだ。男の

手が、シャツの裾からするりと入り込んで、素肌に直接触れてくる。

「ひう……ッ♡」

冷たくも、温かくもない手のひらが、背中の肌に貼りつく。その感触だけで、背筋がざわついた。

手のひらがゆっくり這って、腰のくびれをなぞって、また背中へ戻っていく。

「出張中、ずっと気張ってたんだろ♡君、背中で全部ためるタイプだよね♡」

やさしい声なのに、内容がやさしくない。見られている。

ずっと、見られている。するするとシャツを引き上げられて、背中が外気にさらされた。

「こっち向いて♡」

「む、無理です……♡」

「無理じゃないよ♡ ほら♡」

肩を掴まれ、狭い寢床の上で仰向けに返された。
男がそのまま覆い被さってくる。

身動きできる余白はなくて、至近距離から体の熱
が伝わった。

「……っ、く、♡」

引き上げられたシャツの下から、男の手が胸に触
れた。ブラをずらされて、直接、大きな手のひらで
包まれる。

指は丁寧に、逃げ道を塞ぐみたいに動いた。

「……あ♡」

声が漏れて、自分でぞっとした。男が唇の前に、
人差し指を立てる。

「分かって、ます……♡」

でも次の瞬間、指が頂点を狙うように曲がった。
くに♡

「——ッッ！♡」

息を飲み込んで、声だけは抑えた。それでも体は大きく跳ねた。

尖りかけていた乳首を、男の指が、ぐり、と押さえる。

「反応、早いね♡ いつもこんなに早い♡」

「……っ、しゃ、べらないで。聞こえたら、♡」

「じゃあ、君も声、出すなよ♡」

ふに♡ ふに♡ ふに♡

「……う、ん……ッ♡」

指先が乳首の輪郭を辿りながら、押して、引いて、転がす。丁寧なのが、余計に質が悪い。